

原典で読む

外国人が見た日本

高橋知明

瀬田玉川神社禰宜



第十九回 エメエ・アンベール 『絵で見る幕末日本』(上)

「日本人は、自国の自然の美しさに積極的な関心を寄せていて、景色のよい場所で、一般の関心を引きつけようと努力していない場所はない」

今回ご紹介するのは、スイスの政治家エメエ・アンベールです。文久三年(一八六三)、日本とスイスとの条約交渉のため遣日使節団長として来日し、約二年間滞在。日瑞修好通商条約の締結に成功します。しかし、彼の不朽の功績は、もう一つの面にあると、この本の訳者は語っています。

「それは、さほど長くもなかった日本滞在期間に、よくもこれほど深く詳しく日本という国の神秘の姿、外人には理解の容易ではないさまざまな伝統、民衆の生活、社

会環境と自然現象といったものをとらえて、紀行文風のペンで叙述し、かつ大小百枚にわたる絵とあわせて広範な西欧の読者に紹介したことではあるまいか」と。

それではアンベールの見た幕末日本を紹介していきます。

先ずやはり、彼の目に飛び込んできたものは、美しい日本の風景です。日本各地を訪れた彼は、その都度感銘した様子で、自

が魚を漁っている。至るところで雁や鴨が列を組んで空を渡っており、鷗や海燕が岬や浅瀬のあたりで飛び交っている」

「単独行動をする鳥の中で最も美しいのは、鶯である。透き通る水を熱心に見つめながら、辛抱強く餌を待ち、片方の脚を羽根の下に畳んで、一本足で立っている。その羽の目を射るような白さが、葦や羊草の暗色の背景の中に浮き出している。時々、松の枝の木陰や垂れ下がった柳の下に見かけることもあるが、いつも本能的に、その憂鬱な性格に適合したところの、自然を求めている」

「それに劣らず感嘆させる印象を与えるものは、鶴である。この美しい鳥が空の彼方に一つの点のように現われ、やがて絢爛な姿で地上に降り立つ時、空からの使いが来たかのように思われる。このためにこそ、民族的な空想が、この鳥を神または半神と結びつけて、日本の伝説を作っている。日本語でツルというこの鳥の名前に、神性を表わすサマという敬称を付け加えて、オツルサマとも呼んでいる。鶴は、亀とともに、日本人にとっては、長寿と幸福のシンボルになっている。そして、かれらの意見によれば、幸福とは、心の平安と明るい理性を持つことである」

鳥に対する日本人の情感にまで触れる様子は、日本人は花鳥風月を友として自然を愛でる心豊かな文化を醸成させてきた民族

である、というふうに彼は感じたのではないのでしょうか。

さらに、自然が織りなす風景の紹介に留まらず、日本人の生活文化の中から創造される風景の美しさにも触れています。

「福田における植物の早期の成育と丘陵の頂上にある多数の常緑樹が、同じ緯度にあるながら、一カ所として重複していない色調で、日本の春を告げている」

「竹藪は、日本の風景画のうち、最も好ましい秀作である」「金色の影と重なり合った茂みを持つ高い緑色のすばらしい幹と、よく茂った頭を支える細い強靱な枝、いたるところに無数の長い葉をまとい、空中に立つ数千本の旗のように風に揺れ動いているさま、これ以上、美しい風景はあり得ない」日本の農村風景は、一見緑一色の自然のように感じますが、実は人間の手が入っていないところはありません。しかし、それを全く感じさせず、動植物と人間とが共生し豊穡な生態系までできてしまうほどの風景となっています。驚くべき智慧です。彼は、その美しさに感動したのでしょう。また街中の風景についてもこんなことを言っています。

「美術品と工業品の店の前に、足を止め、覗いてみると、透明な水の中で細かな貝の臥床のあたりを赤い魚が泳いでいる、大

然風景の美しさを表現しています。

例えば、霊妙な山々に囲まれる長崎湾の全景を見て「世界で最も美しい風景」だと評したり、下関の朝の様子は「六時には霧が消えはじめ、亀山宮あたりの街の美景が見え出した。殊に、神社ばかりでなく、役人の邸宅や市場のあたりにも繋がっている松や杉の大樹の美しさに驚嘆した」と称えたり、瀬戸内海を航行しては「日没と共に、風が静まり、旅行中、一番すばらしい夕方になった。月の明かり、澄み切った空、滑らかな海、ただわずかに、何か大きな魚が跳ねた時と潮流のために、軽い潮のざわめきができるだけであった」と、その美しさにうっとりしている様子が分かります。

また、日本の自然風景の美しさに対する彼の視点は、動物にも向けられています。特に彼は、日本の自然界の中に、とても多種多様な鳥が存在していることに對し、その特徴に触れ興味深い記述をしています。

「私を取り囲み、私の住居の魅力となっているもののうち、一番私の心を捉えたのは、鳥類である」

「日本群島の最も特性的風景の一つは、その鳴き声や羽搏きで騒ぎ立てている莫大な量の鳥類である。鶯や禿鷹が谷間の上を回っているかと思うと、鶴がゆつくりと松林から飛び立っている。かなたの葦の茂みや入り江まで海ガラスがやって来るし、鶯

きな陶器の養魚池のところで、好奇心にかられた男女の群れが見とれていた。水槽の中ほどにある満開中の花を持った選ばれた三、四本の植物が美しい集団を形造っていて、華麗な赤と均齊のとれた葉の輪郭と花と茎とが、それぞれお互いに見事な調和を保っている」

金魚鉢一つとっても、日本人はその金魚鉢が街の風景の中にさりげなく溶け込み、且つ彩りをそえるよう、絶妙の調和を醸し出す工夫が見られるというのです。アンベールは「日本人は、自国の自然の美しさに積極的な関心を寄せていて、景色のよい場所、一般の関心を引きつけようと努力していない場所はない」とも書いています。

アンベールはヨーロッパを代表するような美しい風景の国から来た人でしたが、次の一文からは日本の自然の美しさが想像を超えたものであったことが分かります。

「私は、日陰の溪谷、急流の活気あるざわめき、湖を想わせる山に囲まれた入り江の風景、九州の農村の穏やかさと静けさ、そうした長崎郊外の美しい風景を快く想い浮かべた。そして、スイスの風景だけが、日本のこの美しい自然と比較することができないのではないかと思つた。同じように考えている者があると思つた。同じように考えたことのある日本人が、私に、スイスのようにに祖国を思い出させる国はどこにもなかったと語つた」